

Title	EU離脱騒動後にみるアイデンティティの再構築：在英邦人女性が語る移民としての自己
Author(s)	秦, かおり
Citation	言語文化研究. 2018, 44, p. 107-125
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/68016
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

EU 離脱騒動後にみるアイデンティティの再構築

— 在英邦人女性が語る移民としての自己

秦 かおり

Reconstruction of identities after Brexit: An analysis of Japanese women's narratives as migrants

HATA Kaori

Abstract: This paper is to clarify how Japanese women living in the UK as migrants faced Brexit and reconstructed their identities. 31 interviewees, who identified themselves as Japanese before Brexit, show the attitude that they are seeking to find a position in the UK. Some of them try to be in a similar position as ‘cosmopolitan’ Londoners, the others categorise themselves as migrants but divide ‘migrant’ into several categories according to their characteristics, in order to be in the ‘safe’ migrant category. This research concludes that rapid social change could lead to the reconstruction of the identities of minority people who adapt to the new social order. These points will be illustrated with some cases using an empirical approach.

キーワード：移民, インタビュー・ナラティブ, アイデンティティ

1. はじめに

2016年6月23日、英国では欧州連合（以下EU）からの離脱か残留かを問う国民投票が行われた。本研究¹⁾では、主として英国籍の男性と国際結婚をして英国に移住した在英邦人女性たちがその投票結果についてどのような感想を抱き、またどう反応したかを、インタビュー調査から解き明かすものである。社会的背景として、英国のEU離脱騒動には幾つかの要因があるが、本調査に関連するものとしては、EU加盟国同士は査証なしで出入国できるため人の流入が容易で、移民が英国内に多く流入することによって主に単純労働者の労働の場を移民が奪っているという意識が英国国民に働いたこと、治安悪化（テロ事件など）の原因が移民とされたこととEU離脱が結びついたこと（難民受け入れ政策の不同意）など、基本的に英国の中で移民

1) 本研究は、科学研究費（挑戦的萌芽研究 T15K128760, 研究代表者 秦かおり）の助成を受けて行われた研究成果の一部である。

排斥の機運が高まっていたことが大きな要因の一つとされている（庄司 2016ほか）。

2010年に始まった本研究の英国調査に協力していた在英邦人たちは、自分たちを「移民」と呼ぶことはほとんどなく、「英国に住む日本人」というアイデンティティを打ち出してきた。しかし今回の調査では、自分たちは日本人であるという言説はほぼ見受けられず、「移民」としてのアイデンティティが全面的に打ち出され、その中で英国社会のどこに自らを位置づけるかというナラティブが展開されていった。本稿ではその位置付けの過程を、インタビュー・ナラティブの言語要素と非言語要素の分析から明らかにしていく。

2. 背景

2.1. EU 離脱を問う国民投票とその後の分析調査

EU 離脱を問う国民投票は、僅差で「離脱」の結果となり、当然残留という予測をしていたロンドンでは大きな衝撃となった。下記の図 1 が示すように、ロンドンにおいては残留派（薄いグレー）が圧倒的多数であり、スコットランドを除く他の地域が離脱（濃いグレー）に投票したのとは対照的で、地域差が大きく出た結果となっている。

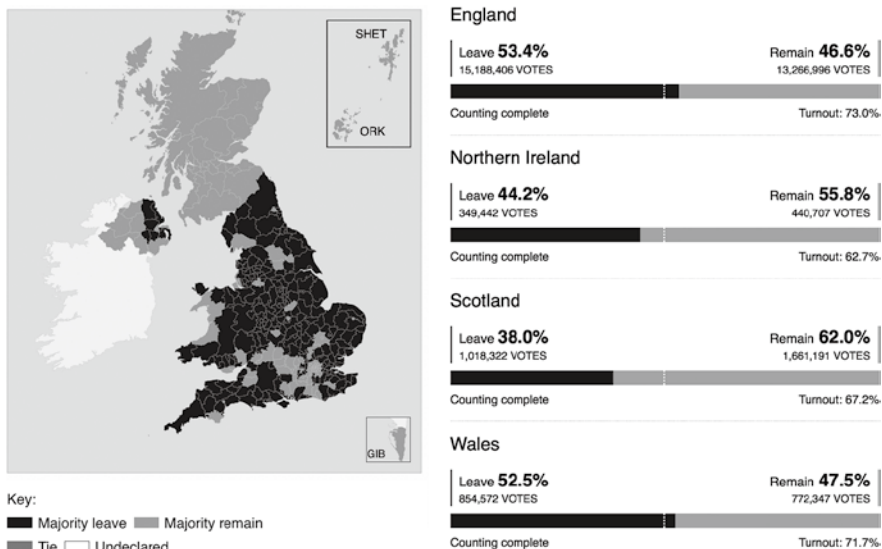


図 1 EU 離脱を問う国民投票結果の地域差²⁾

本研究の調査地域であるロンドンでは、開票が進んだ深夜に進捗を見守ったインタビュー協力者はほとんどおらず、朝起きてみたら離脱の結果が出ていて驚いたという者が圧倒的多数であった。つまり、徹夜で開票を見守る必要など感じないほど、当然のように残留に決まることを

2) http://www.bbc.com/news/politics/eu_referendum/results より引用（2018年1月31日最終閲覧）。

信じていたのである。ロンドンではそれほど、残留派が多く、開票直後は何故そんなことになったのか理解できなかったという。しかしその後、各メディアが次々と原因を調査し始め分析結果を報道し始めた。その結果、特にイングランドではロンドンだけが突出して残留派だったことが発覚したのである。また、それだけではなく、この分析結果は、これまで英国国内で暗黙のうちに、あるいは潜在的に燻っていた格差問題を図らずも暴き出してしまった。例えば、以下の図2は残留派と離脱派の教育格差、年代差、生活レベル、地域差などの特色を表した調査結果の一例である。

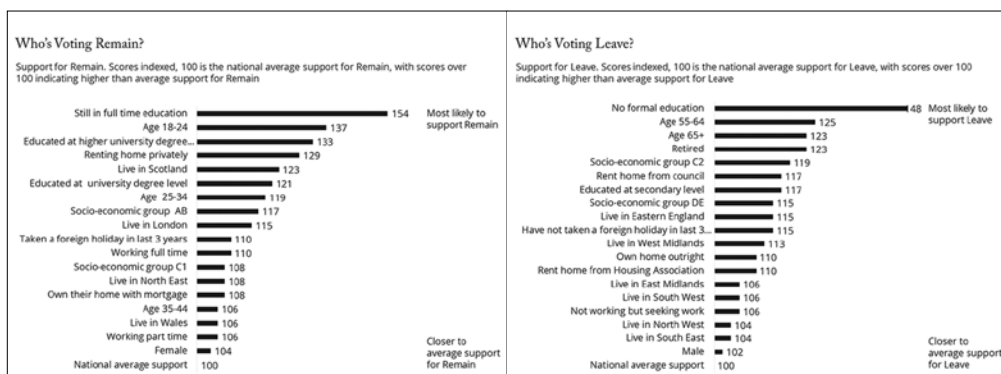


図2 残留派と離脱派の特色³⁾

この図2によれば、教育レベルが高く、比較的若年層で、フルタイムの職に就き、自宅を所有しており比較的都市部に居住している層が残留派、教育レベルが低く、高齢層、無職かパートタイム、地方に住み、住居に関しても国の補助を受けているような層が離脱を支持した、ということになる。多少の数値の違いはあれども、多くの調査媒体が類似的分析結果を公表しており、そこでは「全国民に1票を与えた危険性」「これからこの国を背負う若者に高齢層が将来的な重荷を背負わせた」といった言説が浮上した。特に、ロンドンでの調査においては地方との格差、「見たこともない移民を怖がる地方の人々の愚かさ」を嘆く声が多く聞かれた。

本研究調査対象者の日本人移民たちは、基本的に国際結婚をして英国に渡っており、夫方の義理の両親は英国内、しかも、今回の投票で離脱派が多かった英国地方にいるケースがほとんどである。その場合この投票を（あるいはこの投票結果の分析を）きっかけに、これまでは良好な関係を築いていた親族付き合いに微妙な亀裂が入ったという。日頃表層で接している分には問題なくとも、あるきっかけで潜在的に燻っていた対立や差別意識が顕在化してしまうという現象は日常生活でもよくあることだが、今回の国民投票とその分析結果は、それを多くの「移民との国際結婚家族」に引き起こしたことになる。

3) <http://www.populus.co.uk/2016/05/brexit-index-whos-remain-leave-supporters/>

本稿では、このような社会的背景を受けて、実際のインタビュー調査の場ではどのような語りを展開され、新たに顕在化した「違い」「格差」「差別意識」というものに、在英邦人たちがどのように対処したのかを明らかにしていく。このことによって、マイノリティとして異国に生きる彼女らが、足元から揺るがされた今までの地位をどのように構築し直し、自らを社会の中に位置づけ直すのかを解明していく。

2.2. 理論的背景

2.2.1 アクティブ・インタビュー

本稿で用いられるインタビューは、半構造化インタビューによるアクティブ・インタビュー (Holstein and Gubrium 1995) である。アクティブ・インタビューとは、インタビュイーは単なる情報を提供する箱ではなく、インタビュアーの積極的な語りかけや働きかけといったインタビューの場の相互行為によってインタビューが成立するという考え方であり、そこではインタビュアーとインタビュイーは双方ともその場の参加者として重要な役割を担う。インタビュアーを透明な存在として消し去ること、インタビュイーの回答に影響を与えないようにする考え方は逆に、積極的にその価値判断に参加するこの考え方のもとでは、インタビュアーの参加をも分析の対象とする必要が生じる (山田 2011)。また、半構造化インタビューは、インタビュー項目を全て決めておかず、自然な会話の流れの中に回答を捉えていく方法であり、もちろんあらかじめ質問設定はするが、一問一答のような形はとらない。半構造化インタビューでアクティブであるということは、より自然に近い対話でインタビューを行うということでもある⁴⁾。本研究で用いたインタビューはこのような方式で、かつ録画録音されて行われた。

2.2.2 ナラティブ

ナラティブとは、日本語では「語り」とされ、文学、人類学、心理学など多くの分野で研究されてきたが、ここでは言語学におけるナラティブ分野の潮流を踏襲する。言語学におけるナラティブの構造モデルを確立したのはラボヴ&ワレツキーでありそれはラボヴ=ワレツキーモデル (Labov and Waletzky 1967) と呼ばれる。このモデルにおいては、ナラティブの基準 (canon) が設けられており、ナラティブには、「要旨」(abstract) に始まり、「導入」(orientation)、「展開」(complication)、「評価」(evaluation)、「解決」(resolution)、「終結」(coda) という大まかな段階性を持つ構造があり、語りが遂行されると考えられている。その後、「ナラティブとは何か」という大議論の末、その基準は「個人の経験を語るナラティブとは、実際に起こった出来事と相応する一連の節 (clauses) によって話し手の自叙伝となるような一連の出来事を伝えること」(Labov 1997: 393) と修正されたが、それでも出来事を (何らかの価値体系を持ちながら) 再現することがナラティブであることからの逸脱は起こらなかった。それに対し、それまで言

4) ただし、もちろんカメラの存在やインタビュアーとインタビュイーという立場の不均衡 (秦 2017) は分析の対象となるべきであることを付記しておく。

われてきた一貫した出来事を語るナラティブを「big story」と呼び、それ以外のものを「small story」(Bamberg 2004; Bamberg and Georgakopoulou 2008)と呼んで、これまでのナラティブの定義からはこぼれ落ちていたものも、ナラティブとして分析する流れが現れた。このことにより、ナラティブは「過去」から解放され、現在進行中の出来事や仮定の出来事、ほのめかし、語りの拒否といったことまでも含まれるようになったのである (Bamberg 1997; De Fina, Schiffrin and Bamberg 2006; De Fina and Georgakopoulou 2012, Georgakopoulou 2001, 2011)。そのことによって明らかになるのは、相互行為としての語りとそこに現れるアイデンティティである。相手との間に自らをどう位置付けて語っているのか、語りの中で自らをどう価値付けて語っているのか、社会の中で自らをどう位置付けて見せたいと思っているのかといった、相手あってこそその「アイデンティティの露呈」を見ることができるのである。

本稿ではこの流れを受けて、インタビュアーの語りや相づちなどの反応、促しも分析し、またインタビューの small story を分析していくこととする。その分析を通して、インタビュアーがEU 離脱を問う国民投票とその後の各種分析で移民への国民感情が表面化してしまった新しい秩序の中で、自らをどう位置づけその社会で生きていこうとしているのかを明らかにしていく。

3. データ

ここで取り上げるインタビュー調査は、投票3ヶ月後の2016年9月に、ロンドン南部および南東部、またはその近隣で実施された。合計31名の協力者を得たこの調査は2010年から継続しているものであり(2013年を除く)、初期から毎年継続している協力者もいれば、今回初めての協力者もいる。原則として駐在員など帰国を前提に暫定的に滞在している者を除き、永住権保持者で日本に帰国の予定がない者を対象としている。以下は2010年からの調査協力者数である。

表1 インタビュー調査協力者数⁵⁾(2010-2017年)

	(合計) 人数	使用言語	形態	対象者
2010年	29名	日本語	単独/ペア/グループ	在英邦人
2011年	22名	日本語/英語	単独/ペア	在英邦人, 英国人
2012年	11名	日本語/英語	単独/ペア	在英邦人, 英国人
2014年	8名	日本語	単独/ペア	在英邦人
2015年	17名	日本語	単独/ペア	在英邦人
2016年	31名	日本語	単独/ペア	在英邦人
2017年	30名	日本語	単独/ペア	在英邦人

5) 調査の当初の目的が出産・育児体験の調査だったため、これらはほぼ全て女性へのインタビューである。2011年、2012年の英国人への調査は調査対象コミュニティの英国人女性への聞き取り調査を指す。

本稿では2点のデータを取り上げる。どちらも2016年の調査結果からであるが、例1は、2010年から毎年継続してインタビューを受け続けてくれているペア・インタビューの協力者たちであり、インタビューー2名は親友同士、インタビュアーとは8年越しの付き合いである。データ例2もペア・インタビューで、インタビューー同士は仲が良いが、インタビュアーとは2016年のインタビュー時が2回目の対面であった。これらのインタビューの基礎情報は表2、3の通りである。インタビューは例1、2ともに筆者であるIが行った。

表2 例1の基礎情報

インタビューー	仕事	夫の国籍	在英歴	子供	夫との言語	居住区域
A	兼業主婦	英国(二重国籍)	19年	2子	英語	ロンドン南東部
M	兼業主婦	英国(二重国籍)	13年	2子	英語	ロンドン南東部

例1のインタビューーはいずれも調査を始めた時点では、よりロンドン中心部に近い地域に居住していたが、現在はロンドンの南東部、緑豊かな地域に引っ越しており、そこは以前彼女らが居住していた地域よりも人種混合率が低く、白人率が高い。質の良いグラマースクール(受験をして入る中学校)が数多く点在し、教育熱心な家庭はそのためだけに転居してくるほどの地域でもある。EU離脱投票の比率でいえば、63%が残留に投票した地区であり、ロンドン中心部ほどではないにせよ、残留派が多い地域といえる。

これに対して、例2のインタビューーSはケント在住だが、その中でもロンドンに隣接する地域に居住している。今回ロンドン南部にある補習校に通う子女の保護者を対象とした調査として行ったため、隣接地域のケントから通学するSも対象者となった。Kは日本語補習校に比較的近い地域に居住しているが、ロンドンの端に近い。こちらにはグラマースクールがない代わりに比較的評判の良い中学校があり、ロンドン中心部から離れている分あまり人種は混っていないという。表3はSとKの基礎情報である。

表3 例2の基礎情報

インタビューー	仕事	夫の国籍	在英歴	子供	夫との言語	居住区域
S	会社員	EU	24年	1子	英語	ケント
K	会社員	英国	17年	2子	英語	ロンドン南部

上記Sが住む地域は離脱派が49.8%で少しロンドン側に行けば残留側、少しケント側に行けば離脱側という境界線上の地域であり、Kが住む地域はロンドンで唯一53.68%もの離脱派票を獲得した地域である。

これら2つの例を中心に、在英邦人が新しい社会の流れの中でどのように自らの立ち位置を

確立していくのかを検証していく。

4. 分析

EU 離脱騒動後の本調査において、調査協力者である彼女たちの語りの中で最も特徴的であったのは、彼女たちが語る自己のアイデンティティの示し方に変化が見られたことである。これまで「日本人として何かできることないかなって」（震災後のチャリティ活動の意義について問われて：2012年の調査から）「だってイギリス人じゃないし」「日本人でなくなることにはためらいがある」（永住権を獲得しても市民権は獲得しないのかと問われて：2015年の調査から）、といった、日本人としてのアイデンティティを多く見せていた彼女たちが、この騒動について語る時、「日本人」としてのアイデンティティを後景化し、移民として、あるいは英国社会の一員としての自己の立ち位置を明確化しようとするのである。平時においては継続して見せていた己のアイデンティティでも、社会が流動する時、すなわちその社会の中でどの立ち位置を確保して生きていくかを決めなければならない時は、それを後景化させても、自らを英国社会にとって有用なカテゴリーに入れることの方が重要課題だったのではないかと考えられる。以下の例1、例2をそのような観点から考察していく。

4.1. 「私たちは何者か」：語りにみるアイデンティティ

例1は、これまで7年間の調査の中で日本よりも英国の社会規範の方が良いとし、親近感を覚えてきたAとMが、その英国社会の中での自分たちの立ち位置を語る場面である。二人が居住する地域は37%が離脱に投票しているので、確率としては離脱派の人と会ってもおかしくない。例1の会話の前では、インタビュアーであるIがその点を指摘し、周囲でそういう話題はなかったのか質問をしている。

例1) 「分かれちゃってるんだろね」

- 1 A: 離脱派離脱派っていうけど>°あんま°<
- 2 話さない=たぶ [んね
- 3 M: [ね::そうなんだよ [ね::
- 4 A: [ん::
- 5 I: [ん::
- 6 (.9)
- 7 A: なんなんだろね.>でもなん-<知らないうちに分かれてんのかな
- 8 私たちの周りって
- 9 M: まそういうのもあると思うよ: うん::

- 10 I: [んん::
 11 A: [んん::
 12 結局(.)イギリス人イギリス人してる人との
 13 °あ°付き合いが[あまりないって°ことだよね°
 14 M: [んん:: >なんかだっってほらく
 15 あの::(.9)結構言われてたじゃんあの::(.5)年配層がまず離脱↑派
 16 A: [うんうん
 17 I: [うんうん
 18 M: あ[と
 19 A: [NHSのあれでね=
 20 M: =うん(.)あとあの::(.)んと学歴とかで見る↑と(.)
 21 °やっぱり°ちょっと低学歴::の人が離脱派傾向にあるっていう
 22 それでまあ周りを見ると↑さ
 23 あんまそんな年配者の知り合いとかもないし[:
 24 A: [いないね::
 25 M: [あんまそこまでバリバリ
 26 A: [労働者階級ともね::=
 27 M: =そうそうバリバリ労働階級の知り合いも
 28 [あまりいないからまあ
 29 A: [う::ん
 30 M: こうなんか(.)分かれちゃってるんだろうね=
 31 A: =そうなんだろうね::
 32 M: そういうひとたちとあまり(.)[つきあいが無いというか=
 33 A: [交流がね::
 34 =ないんだろうね::

この例1で述べられている離脱派が年配層で比較的学歴が低く労働者階級であるという点は、各種分析から報道されていたことで、「>なんかだっってほらくあの::(.9)結構言われてたじゃん」(14-15行目)というMの発言はそれらの報道を受けての発言だったことがうかがわれる。ここで焦点となるのは、その分析結果を念頭に入れた上で、AとMが自分たちをどう位置付けているか、という点である。

Aはまず、自分たちの周囲は、日常接する(会話をする)人々の中で離脱や残留について話さないわけではなく、「知らないうちに分かれてんのかな私たちの周りって」(7-8行目)と疑問とも提案とも取れる投げかけをMに行う。Mの賛同を得ると、Mは更に「イギリス人イギリ

ス人してる人」(12行目)との付き合いがあまりないということだと結論づける。まず、ここでAとMを一つのカテゴリーとした時の、それとは異なる英国国内のカテゴリー、「イギリス人イギリス人してる人=離脱派」という分類が成立する⁶⁾。それにかぶせるように、14行目からMはその「イギリス人イギリス人してる人⁷⁾」カテゴリーの特徴を述べていく。まず、「年配層」(15行目)であり、「ちょっと低学歴」(21行目)であり、「バリバリ労働階級」(27行目)な人々ということになる。MはこれをAとの協働構築によって確立していく(24行目, 26行目, 31行目, 33行目, 34行目)。

結果として、MとAは、自分たちについて、「イギリス人イギリス人して」いない人=残留派として位置付け、それ以上の位置付けを行わなかった。「イギリス人イギリス人してる人」は「そんな」(23行目)「そこまで」(25行目)「そういうひとたち」(32行目)と「ソ系」を使用して形容し、自分たちとは同一では決してないものと捉えているのが分かる。その一方、AとMについての言及を見ると「私たちの周り」(8行目)、「周りを見ると」(22行目)のように、AとMだけでなく、AとMが所属しているある程度の広がりを持ったコミュニティ全体を指していることが分かる。そのことから、ここではAとMは自分たちを残留派の一員と捉え、残留派英国在住者の一員として、自分たちは根付いていると結論づける。つまり、今、自分たちの周囲に起こっている分断は、自分たちが英国社会の中で移民としてはじき出されているからではなく、残留派と離脱派が分断しているので、離脱派の声を聞かないのだ、私たちが締め出されているわけではない、という帰結に至るのである。

4.2. 意見の不一致と同化への挑戦

例2では、S, K, Iが会話をしている。表2の基礎情報のように、Sはケント州に在住しており、職場も離脱派が多く、残留派が多いロンドン中心部とは事情が異なることが語りの内容からもうかがわれる。ここでは、先の例1でAとMが残留派英国国民としてのアイデンティティを協働構築していたのに対し、Sとロンドン南部に居住するKとの意識の差が明らかとなり、協働構築というよりはSが持てる材料を出しながら自らの行動の正当性を主張しつつもKとの関係に配慮する姿を分析していく。

6) この時、「私たち」を「日本人」たる「私たち」と解釈することも可能だが、ここでは、「私たち」に対立するカテゴリーとして提示される「イギリス人イギリス人してる人」が残留派のイギリス人にとっても対立する性質を持つ「イギリス人イギリス人してる人」であるため、その可能性はないものと判断する。

7) ここでいう「イギリス人イギリス人してる人」という真意は不明だが、報道においては、今更EUから離脱したところで古き良きイギリスを取り戻せるわけではないのに、一部の人は離脱さえすれば昔に戻れると思っている、という言説が残留派から流されていた。したがってここでは、「(後ろ向きな意味で)懐古主義的な、伝統主義的な」という意味であろうと推察される。

例2-1) いじめへの予備対策

- 1 I: >どうですかね.<それがあの:: (3) 居心地:の (1.2)
- 2 K: °うん°
- 3 I: 悪さには. (.) まだつながら::ない?
- 4 (1)
- 5 K: わ [たし [はないです.]
- 6 [(肩をすくめる))]
- 7 I: [かな? ↓ってい [う
- 8 S: [う::°ん わた↑し:も:特には↓ない::
- 9 ですけど [も:] 一応:学校に<行く:>に [あたって:] まああの:
- 10 [(鎖き)) [(鎖き))]
- 11 [とうよ-] (5) 特にその° (.) [ねえ. ↑ポリッ] シュの人たちとか:
- 12 [(顔を上げてIを見る)) [(2度鎖く))]
- 13 バッシングを受けてる地域もあるようなの [で:]
- 14 [(鎖き)]]
- 15 I: う:: [ん
- 16 S: [まあうち↑は: い-
- 17 [(4) どっち↑かっちゅと日本人アイデンティティの方が強い]
- 18 [(右手の人差し指を自分に向け, 二度回す動作をして下ろす))]
- 19 ので. (.) 特に↑彼女を個人的にアタックする子はいない>かも
- 20 しれないけど:< (.) いずれにせ↑よ:<- そのがい- (.)
- 21 [↓移民の子だ] ってい [う::
- 22 [↑ (Iを見て2度鎖く))]
- 23 I: [うんうんうん°うんうん°
- 24 S: こととか↑で: hhh
- 25 なんか::被害を被るかも<しれ↑ない:の [↑で:] > (.)
- 26 [(鎖き))]
- 27 一応:その [予備£↑対策£] としては: hh
- 28 [(顔を上げてIを見る))]
- 29 I: °うん°
- 30 S: あの:>学校でなんか [やなこと とか<言われ] た [↑ら:]
- 31 [(顔を上げてIを見る)) [(鎖き))]
- 32 I: うん.
- 33 (.)

- 34 S: °その:°うちの:両親はね? ずっと仕事してて [税金も]
 35 [(顔上げてIを見る))]
 36 払っ↑て:[:
 37 I: [↑うんうんう [んうん.
 38 S: [あの:.
 39 やってるんだか [↑らっ[て:]
 40 [(顔上げてIを見る))]
 41 I: [うん.
 42 (.6)
 43 S: って (.3) イギリス°人° その辺のイギリス人には
 44 [できない仕事をして↑るんだか↑ら] [っていう
 45 [(4度顔しながら))]
 46 I: [う::ん
 47 (.)
 48 S: であの:: (.5) [はっきり言いなさい↑ねっ [て::
 49 [(顔上げてIを見る))]
 50 I: [うんうん
 51 そう [<です↑ね>
 52 S: [やっぱ[₁言っとき]ま[₂した:.]

例2-1では、当初のIの問いかけに、KもSも最初は居心地は悪くないと答えるが、Sはその後付け足して、子供へのいじめ対策を語り始める。自らの子供を「移民の子」(21行目)と位置付け、どのようなことかは具体的に言及しないものの「なんかやなこと」(30行目)を言われる可能性があることを懸念し、その場合は両親がずっと仕事してて「税金も払って::」(34-36行目)「その辺のイギリス人にはできない仕事をしてるんだから」(43-44行目)とはっきり言ってやれと子供に「やっぱ言っときました:」(52行目)と述べている。この一連のSの語りの間じゅう、Kはなんの反応もしない。SはもっぱらIを見つめて顔上げて、Iの反応を確認し、Iが頷くと更に話を続けるという会話スタイルをとっている。協働構築というよりは、Iの承認を待ち、同意を得ると会話をつないでいる。

「その辺のイギリス人にはできない」という発話は、「その辺のイギリス人」の子供に対して発する言葉としてはかなり衝撃的な発言の示唆と思われるが、この「やっぱ言っときました:」(52行目)の発話後、KがSの語り開始後、初めて口を開く。

例 2-2) 行動への小さな疑問の提示と正当化のジェスチャー

- 52 S: [やっぱ [1言っとき]ま [2した:.]
 53 [1 ((大きく頷く))]
 54 K: [2言ったの?=
 55 S: =[↑うん言ってた.]
 56 [((Kを見て2度頷く))]
 57 I: [う:ん
 58 K: °へ::°
 59 S: う::ん だ↑て:
 60 イギリス [人ができる仕事を↑取ったって思われてると(.3)
 61 やだか↑ら:]
 62 [((左手の手のひらを上に向け、掴むような動作))] *1
 63 I: ↑ねえ?
 64 (.)
 65 S: そうじゃ [ないんだ [よと.]
 66 [((Iに視線を戻し、左手を振り下ろす))]
 67 I: [う:ん . イギ↑リス人が [払った税金じゃないもん
 68 S: [イギリスで埋まわら-(.)
 69 [((左手を振り下ろす))]
 70 そう
 71 I: ↑ね:.
 72 (.)
 73 S: で: [イギリス人がで↑きない仕事を.] (.3) [私たちは] (.)
 74 [((左手を前に伸ばす))] [((左手で自分の方を指す))]
 75 [に↑なってるの↑よ]って.
 76 [((左手を前に伸ばす))]
 77 <特-> [特殊技術↑で]
 78 [((左手を自分の方から前へ動かす))]
 79 補っ [てるんだか [↑ら::
 80 I: [う::ん [うん
 81 (.)
 82 S: ↑私たち [がいなかった↑ら:] 実は (.)
 83 [((左手を左右に動かす))]
 84 わた [し↑の°コ- (.3) コリーグと°] (.)

- 85 [[((左手を反時計回りに回す))]
 86 [イギリス人のコリーグとか] ↑も: hh
 87 [[((時計回りに回す))]^{**2}
 88 その会社が[ない]:ことによって仕事↑ないかも
 89 [[((左手で下を指す))]
 90 しれないだか [ら:
 91 I: [うん.
 92 (.)
 93 S: わたし:[1人]いることによって
 94 [[((人差し指を机に置く))]^{**3}
 95 [↑もしかして(.) ほかにも仕<事が->
 96 [[((人差し指で机を数か所指す))]
 97 ね? (.) できたっ↓て]ゆうことも:あるうるから:
 98 I: うん.
 99 S: そんな単純に移民は帰↑れってあの(.) ふうなこと°言われる
 100 (6) 筋合いはないわ↑よ っと [はっきりに言いなさい [°↑よっていう
 101 I: [う:ん. [↓う:ん.
 102 S: [°のは =
 103 K: [°あそう:°
 104 S: =°あ[る.°
 105 K: [う::ん

仮定の話 (hypothetical scenario; Georgakopoulou 2001) であるいじめに対して、「(もしかしたら相手の親を指す可能性が高い) その辺のイギリス人」にはできない仕事をしていると言いなさいと言ったというSに対し、Kは初めて口を開き、「言ったの?」(54行目)と述べる。それは上昇トーンで、聞き取れなかったわけではないので、明らかに疑問を呈する発話である。

それに対して興味深いのは55行目のSの返答である。Sは52行目で「言っときました」と明らかに主語は自分であるかのように語りを展開していたにもかかわらず、疑問を呈された途端、55行目においては「言ってた」と他者への主語転換を行ったのである。それに従い、その後の語りを見ていくと、73行目で「私たちは」、82行目で「私たちが」となっている。そして背景情報として、Sの夫はEU移民であり、イギリスで長年働いている。このことを考え合わせると、Sの子供がいじめを受けたと仮定するシナリオの中で、「その辺のイギリス人にはできない仕事」をしているのはSの子供の「両親」つまり、SとSの夫、ということになり、52行目よりも上の仮定の話はすべて夫の発話であったと受け取ることも可能となるのである。

Sはその直後、いじめ対処法の正しさを語りだす。この語りは103行目で「あそう:」105行目で「う::ん」という反応を引き出すまで、Kからは一切の反応を得られていない。反応を得られないSは、語り口はそれほど変えていないように見えるものの、実はジェスチャーで特徴的な変化を遂げている。以下の図3はSのジェスチャーの変化を表したものである。

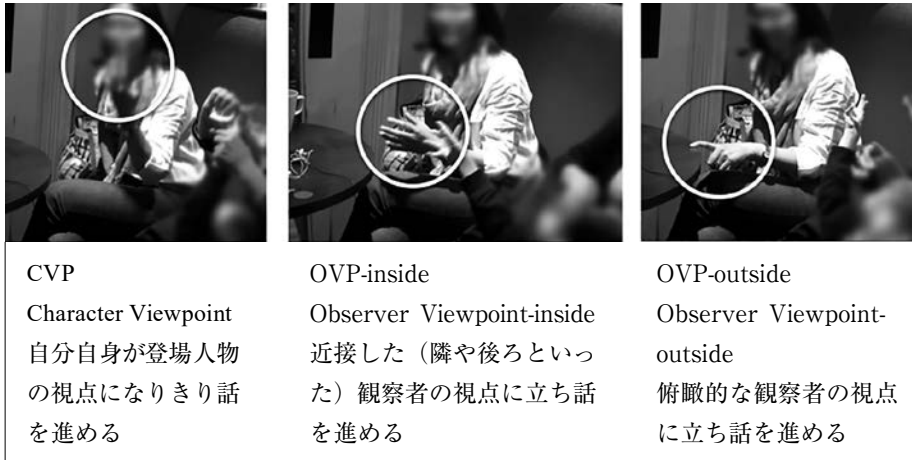


図3 ジェスチャーの変化⁸⁾

SはCharacter Viewpoint（以下CVP）を62行目付近（書き起こし中の※1）で、87行目付近（書き起こし中の※2）でObserver Viewpoint-inside（以下OVP-i）に切り替え、さらに、94行目（書き起こし中の※3）でObserver Viewpoint-outside（以下OVP-o）に切り替えている。これらの一般的な説明は、図3の中に書かれた通りだが、CVPの効果は登場人物の感情を込めやすいので相手にその人物の気持ちを伝えやすいが周囲の状況や背景情報を伝えにくい傾向にあることである。通常、語り手が登場人物になりきり感情を伝えたいと思う時、CVPが使われる。それに対して、OVP-iは、CVPよりも観察者の視点に立つので客観性が確保され、感情的な印象を与えず相手を説得する時に使いやすく、またCVPよりも目線が広がるため、情報量が増える。このことも、相手を説得する際に効果的である。更に、OVP-oは、通常机の上を劇場のように見立てて自分を出演者から完全に切り離し、俯瞰的な立場から話を進める。客観性の確保と状況説明のための情報量の確保に関してはこの方法が最も豊富となる。Sは自らの主張を繰り返しながら、順番にCVP→OVP-i→OVP-oとジェスチャーを変えていくが、それは結果として説得力の高いステップに次々と上がっていったということになる。CVPの60-62行目では、「イギリス人の仕事を取る」ジェスチャーの主体は物語世界の中の「わたし」であるが、その「わたし」は明らかに「イギリス人」の目線から見た「出て行って欲しい移民の表象としての私」を明示

8) ジェスチャーの基礎的な区分に関してはMcNeill (1992, 2005)、喜多 (2002)、視点とジェスチャーに関しては細馬 (2008)、細馬ほか (2011)、片岡 (2008)、CVPやOVPの使い分けや効果については片岡 (2017) に詳しい。

している。次の OVP-i の 82-87 行目では、「私たち」(82 行目)に物語の目線が映り、「わたし↑の°コ-(.3) コリーグ」(84 行目)や「イギリス人のコリーグ」(86 行目)は手をくるくると回す仕草と共に起し、一人ひとりの人物像というよりは、そのカテゴリー群として描かれる。そして 93-97 行目では「わたし」も「仕事」も共に机の上で一つ一つ指で示され、個別にしかし輪になって共に生起していくものとして描かれる。つまり、ここでのジェスチャーの移り変わりは、単に主観から客観への移り変わりだけではなく、敵対から共生への移り変わりをも示していることになる。

この後 S は「のほ == °あ [る.°] (102-104 行目) と語りを今・この場に引き戻すが、K は「あそう:」(103 行目), 「う::ん」(105 行目) という反応で説得されているとは言い難い。結局その直後、I が横から口を出す形で S に賛成の意を表す。

例 2-3) 収束へ向かうディスコース

- 106 I: でもそのぐらい↑ね:あの::思っ^てない^と↑ね:もしな[んか:
 107 S: [う:ん.
 108 [((大きく頷く))]
 109 (.4)
 110 I: い[ろんな↑ね. わかっ^てない^子く^{たち}:が>
 111 S: [やっぱり:
 112 I: い↑る^かも↓し^れ[ない^{から}↑ね
 113 S: [ええ:
 114 [((大きく頷く))]
 115 (.)
 116 S: やっぱり:あの:: (1.1) こち↑らも: (.3) あまりにも自然に
 117 [溶け込んでいるの[で:]
 118 [((左手を自分の方から前へ出す))]
 119 I: [う:ん
 120 (.)
 121 S: <自分が移民の[子>↑だ]っ^ていう^{かん}- (.) とかっ^て
 122 [((左手で自分を指す))]
 123 ↑特°べ°に意識し↑ないで行^{って}ると<思^う>ん^{です}よ[↑ね
 124 I: [う::ん う:ん
 125 S: んだ: (.4) [↑ 1 人の子に>さ^うい^うこ^と<言^{われ}た]と^きに:
 126 [((左手人差し指を左から右に動かす))]
 127 I: う:ん

- 128 (.)
- 129 S: それを急に自分の[頭の>中で自分で<整理]できない[::
- 130 [(人差し指を頭の横で回す動作))]
- 131 I: [うんうん.]
- 132 [うん.]
- 133 S: [と思うので:[↑ショッ[クだけで?]
- 134 [(左手を胸に当てる))]
- 135 I: [うん.]
- 136 (.)
- 137 I: う[ん.]
- 138 S: [嫌なこと言われた[ショックだけで:
- 139 I: [ね↑え:
- 140 (.3)
- 141 S: 引っ込ん-
- 142 (.5)
- 143 I: う[:ん
- 144 S: [でしまうのはかわいそうだ↑な
- 145 [っというのは°うちの子[思います°
- 146 I: [そうです↑ね: [°う::ん°
- 147 S: ↑でも(.4)とりあえず今ところは特に:
- 148 I: うんうん.[うん.]
- 149 S: [直接的な:(.3)い↑やな:
- 150 (.)
- 151 I: う[:ん.]
- 152 S: [体験は↑ないので.]
- 153 I: う[:ん.]

上記例2-3では、Kは一切発言していない。Sは自分の主張を曲げず、ただ、最後に、「とりあえず今ところは特に:直接的な:(.3)いやな:体験はないので」(147-152行目)と、これら全てが仮定の話であることを念押ししており、実際にそんな嫌な出来事があったり、嫌な子供がいるわけではないことを示唆している。これをもってこの話題は収束するが、結果として最後までKは特にこの話に対して賛同を示さず、Sの正当化はKにとって「あそう:」程度の理解以上のものをもたらしていない。結局、KとSは最後まで意見を共有せず、ただ、その場をやり過ごし、Iが間に入って収束させるという形となった。

4.3. EU 離脱騒動にみる在英邦人のアイデンティティの変化

これまでのインタビューにおいては、調査者も含めてほぼ全員が日本人であり、調査において生起するのは、日本人であるという国籍や生い立ちの文化から来るアイデンティティであった。それは英国と比較して良い場合もあれば悪い場合もあるが、自らの中に、良くも悪くも日本人としてのアイデンティティを見出してその視点からストーリーを語ることによって、最終的にインタビュアー、インタビュイーともに皆が日本人として同調しやすいものであった。

ところが今回、彼女たちは単純に「日本人」としてのアイデンティティを語るだけでは済まなくなってしまった。なぜなら、今回のEU離脱騒動を通して、移民は差別の対象であることが明白になり、そして英国社会の中では彼女たち日本人は「移民」であるからだ。新しい秩序の中で彼女たちは、自分たちが持つさまざまな属性の中の幾つかの要素を取り出して「差別されない・しない移民」としての立場を確立しようとしたのである。ロンドンに住む意識の高い残留派のロンドンナーとしての「移民」、周囲を白人に囲まれ迫害されそうなるEU移民をパートナーに持つ「移民」、イギリス人と一緒にいるから大丈夫そうなる「移民」など、日本人であるということ以外の、それぞれが背負う移民としての属性が大きくクローズアップされた。長年同じインタビュイーにインタビューをしていたはずなのに、EU離脱騒動をきっかけに初めて、義理の両親との話や将来への不安を聞くこともあり、政治的な急変は異国に住まう人々に深刻な影響をもたらすことが浮き彫りとなった。

5. まとめ

本稿では、2つのデータを中心に、EU離脱を問う国民投票とその結果を分析する報道がもたらした影響を、在英邦人に対するインタビュー調査から分析した。その結果、英国内部においても、これまで潜在化していた格差や差別が顕在化し、また移民排斥運動が起こる中で、これまで「日本人」として比較的差別されにくい立場にいた彼女らは、「移民」としての自らの様々な属性に目を向けざるをえなくなったという現実が露わになった。これまで「在英邦人」としてのカテゴリーの元に同一化してきた彼女たちは、「移民」を細分化し、自らの立ち位置を新たな社会秩序の中に置き直し、新たなアイデンティティを構築し直そうとしている様子が観察された。

今回取り上げたデータは残留派の例であったが、中には自らが移民でありながらも離脱派の場合もあった。その場合も、「移民」を細分化し、自らがよって立つカテゴリーである「移民」は排斥されない方に分類するのである。興味深いのは、残留派であっても離脱派であっても、「移民」を細分化し、「排斥されそうなる移民」と「安全そうなる移民」に大分する作業は、誰もが行っていった点である。社会が変動期を迎え、自らの足元が揺らぐかもしれない時、まずはその社会の中での居場所の確保を行うのは当然のことかもしれない。今回の調査では、それまで日

本人として比較的同じ土俵に立てていたと感じていたラポールは完全に崩れ、インタビューの場は基本的に「英国対策をする彼女たち」対「日本から来た日本人」の形となった。

本調査が行われた2016年9月の1年後、2017年9月にも同様の調査が行われたが、その時にはもう大きな変化は収まっており、またいつものインタビューに戻っていた。その意味でも、2016年9月の調査資料は、社会情勢の変化がマイノリティにとっていかに危機的なものであるかの証左として貴重である。今後、さらなる分析を進めたい。

トランスクリプト記号

[オーバーラップ開始部
(.)	マイクロポーズ
(..)	0.5秒以上のポーズ
=	続いて聞こえるように発話された箇所
↑	上昇イントネーション
…	言いよどみ
@	笑い
:	長音（音の引き延ばし）
°°	他の箇所よりも小さく聞こえる語
h	呼気
()	著者による補完
() 内空白	聞き取り不可能な語
(())	ジェスチャーなど身体動作
	その上の行の発話とジェスチャーの始点を合わせている
下線	強調
><	他よりも速く聞こえる語
<>	他よりも遅く聞こえる語
£ £	笑いながらの発話

参考文献

- Bamberg, Michael (1997) Positioning between structure and performance. In Michael Bamberg (ed.). Oral versions of personal experience: three decades of narrative analysis, *Journal of narrative and life history*, 7, 335–42.
- Bamberg, Michael (2004) Talk, small stories, and adolescent identities. *Human development*, 47, 331–53.

- Bamberg, Michael and Alexandra Georgakopoulou (2008) Small stories as a new perspective in narrative and identity analysis. *Text and Talk*, 28(3), 377–396.
- De Fina, Anna and Alexandra Georgakopoulou (2012) *Analyzing narrative: Discourse and sociolinguistic perspectives*. London: Cambridge University Press.
- Georgakopoulou, Alexandra (2001) Arguing about the future: On indirect disagreements in conversations. *Journal of Pragmatics*. 33, 1881–1900.
- Georgakopoulou, Alexandra (2011) Narrative analysis. In Ruth Wodak, Barbara Johnstone and Paul Kerswill (eds.) *The SAGE handbook of Sociolinguistics*. pp.386–411. London: SAGE.
- 秦かおり (2017) 「対立と調和の図式—録画インタビュー場面における多人数インタラクションの多層性—」片岡邦好・池田佳子・秦かおり (編) 『コミュニケーションを粹づける—参与・関与の不均衡と多様性』pp.131–154. くろしお出版.
- Holstein, J. A. and Gubrium, J. F. (1995) *The active interview*. London: Sage Publications, 山田富秋他訳 (2004) 『アクティヴ・インタビュー：相互行為としての社会調査』せりか書房.
- 細馬宏通 (2008) 「発話とジェスチャーはいかに話題の視点を表現するか？—日本語における左右概念を巡る個人内・個人間相互作用」篠原和子・片岡邦好編『ことば・空間・身体』pp.37–68. ひつじ書房.
- 細馬宏通・片岡邦好・村井潤一郎・岡田みさを (編) (2011) 「相互行為のマルチモーダル分析」特集号. 社会言語科学 14.
- 片岡邦好 (2008) 「「身体 of 詩学」による共創という視点」片岡邦好・池田佳子編『コミュニケーション能力の諸相: 変移・共創・身体化』pp.229–257. ひつじ書房.
- 片岡邦好 (2017) 「マルチモーダルの社会言語学—日・英対照による空間ジェスチャー分析の試み—」井上逸兵 (編) 『対照社会言語学』pp.82–106. 朝倉書店.
- 喜多荘太郎 (2002) 『ジェスチャー—考えるからだ (身体とシステム)』金子書房.
- Labov, William and Joshua Waletzky (1967) Narrative analysis. In J. Helm (ed.), *Essays on the verbal and visual arts*, 12–44. Seattle, WA: University of Washington Press.
- McNeill, David (1992) *Hand and mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- McNeill, David (2005) *Gesture and thought*. Chicago: University of Chicago Press.
- 庄司克宏 (2016) 『欧州の危機—Brexit ショック』東洋経済新報社.
- 山田富秋 (2011) 『フィールドワークのアポリア：エスノメソドロジーとライフストーリー』せりか書房.